

臨床心理士養成における「感性教育」を加味した臨床教育 —大学院生の学びから学ぶ—

感性教育臨床研究所（前西南学院大学大学院） 小林隆児

この3月、私は西南学院大学を定年退職したが、その1、2ヶ月前から新型コロナウイルスの感染が全国に急速に広がり始め、とうとう卒業式も送別会も中止となり、教え子たちや教員仲間との直のお別れも叶わないままに、私の大学教員生活は幕を閉じた。なんとも寂しい幕切れであったが、個人的な理由で最終講義だけは早めに計画したおかげで無事済ませることができた。それは私にとって唯一の区切りの出来事となり、今では忘れられない大切な思い出となった。

その後、さらに事態は深刻化し、緊急事態宣言が全国に発出されるまでに至った。大学は入学式、オリエンテーション、そして講義にいたるまで、ありとあらゆる行事が中止を余儀なくされ、今ではオンラインでの教育が日常化するに至っている。学生も教職員も大混乱の中での新学期対応で、大変な苦勞の連続であろうと同情の念を禁じ得ない。

この原稿を私はいまだ非常事態宣言の延長下にある東京で執筆している。8年間の単身赴任生活を終え、早々に家の片付けと引越しを済ませたおかげで、緊急事態宣言前に、東京に戻ることができたからである。

本誌への寄稿（小林、2018c、2019d）は今回が最後となるゆえ、大学院臨床心理学専攻の立ち上げから4年間、私が試行錯誤の中で実践した教育を通して、大学院生た

ちがどのような学びを体験したのか、彼らの体験談を取り上げながら、振り返ることにした。

*

在任期間中に私が大学院で担当した科目は、「臨床心理面接特論」「臨床心理学研究法特論」「精神医学特論」「障害児者心理学特論」「臨床心理学演習」「臨床心理実習」などである。学部では社会福祉学科に所属し、そこでの担当科目も少なくなかったため、この4年間は正直かなりしんどいものであった。

学部でもそうであったが、とくに大学院の教育で心がけたのは、生きた教材に基づく足が地についた着実な学びを学生に経験してもらうことであった。そのことを強く思い続けてきたのは、私が医学生時代、二十歳になったばかりで自閉症の療育ボランティア活動に従事し、子どもたちと直に触れ合い、そこでの数々の体験が臨床家になってから臨床研究を蓄積していく上で、大きな原動力となっていることを痛感したからである（小林、2020a）。

専門知識を学ぶことも大切であるが、気を付けなくてはならないのは、専門知識は正しいものだとは鵜呑みしないことである。まずは自分で生の体験をし、それをもとに専門知識を学びながら、自分なりに咀嚼し相対化して考える習慣を身につけることが大切である。

*

このような思いから、私は大学院のいかなる科目であっても、その学びの基盤となるものをいかにして学生に身につけてもらうかに腐心してきた。これまでそれを私は「感性教育」と称してきた（小林、2017a；2017b）。「感性教育」といっても独立したものとして位置付ける必要などなく、要は人間観察とはどんなことかを肌で感じ取ってもらうことをねらったものである。具体的には、乳幼児と母親の交流場面を新奇場面法で録画したビデオを供覧し、そこで何を感じ取ったかを素朴に語り合い、考えていくことである（小林、2017b）。

このような方法が大切だと考えるに至ったのは、大人であれ、子どもであれ、人間のこころのありようを掴み取るためには、「関係」の相で観察することが必須であると確信したからである。外的現実であれ、内的現実であれ、人間のこころは必ず「関係」において特有な動きを示す。人間の人格は会う人によって異なる一面を示すと喝破したのはサリヴァン（Sullivan、1954）であるが、そのためには、乳幼児と母親の交流場面を観察する中で観察者自身のこころがどのように動いたかを肌で感じ取ることが肝要だと考えたのである。その際、この成否を握るのは、学生が体感したことをうまくことばで引き出すための教員の技術である。

当初は、誰でも親子の交流場面を観察して感じ取ったことを自由に述べることは容易なことだと思いがちだが、いざ行ってみると、これがなかなか手強いことだと気づかされる。正解のない答えを要求されるとかえって言い澁んでしまう。感じたことを言葉にすること自体の難しさもあるが、

自然観察と違って、人間観察では観察者の内面が強く刺激され、日頃は意識下に潜在化して気づかなかったような思いが突然顔を覗かせることが少なくないからである。

そのため教員は、学生が感想を述べる際に見せる微妙な反応を見逃さず、それを引き金として学生が実際に感じたことを抵抗なく述べるようにもっていかなければならない。ただし、学生が感じ取ったことをただ自由に述べて終わりにしてはならない。感じたことが、具体的にどのような場面で、どのような動きで誘発されたのか、その根拠となる事象を明確にするように努めることである。なぜなら感じたことを自由に述べるだけでは主観の域を出ず、単に主観的な事柄として済まされてしまうからである。

このことが実際の面接では極めて重要となる。たとえば、面接で私はクライアントの何気ない振る舞いを目の当たりにして、「いまあなたはこうこう振る舞いましたね。なぜそのような振る舞いをしたのでしょうか」とよく問いを投げかける。そこに私はクライアントの無意識のこころの動きを感じ取り、クライアントにそこに目を向けてもらう。このことが自らの深層心理を理解する契機となることが圧倒的に多いからである。

*

以上、私が「感性教育」で心がけていることを述べたが、こうした試みが学生にはどのような体験となったのか、講義の最終回に講義の体験談として学生に自由にレポートとして纏めてもらっている。1学年の前期と後期の講義を通して体験した内容である。ここでは2人の学生の体験談を取り上げ、そこから私が学んだことを以下述

べてみよう。レポートのタイトルは学生自身がつけたものである。傍点は筆者がつけた。

なお、「精神医学特論」は1年の前期開講科目で、テキストとして『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』（小林、2014）を用い、乳幼児と母親の交流場面を新奇場面法（SSP）で録画したビデオを供覧した。「障害児者心理学特論」は1年の後期開講科目で、前期の学びをもとにテキストとして『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く』（小林、2017c）を用いた。

1. A子さんの場合

（前期科目「精神医学特論」での体験談）
「臨場感のある講義における貴重な学び」

実際のSSPの映像を見てディスカッションをしながら進めていく講義は他科目とは全く異なるものであった。この講義において私は臨場感を抱きながら毎回理解を深めることができたように思う。というのは、映像を見て、まず印象に残った点を観察記録シートに書き、それをもとにディスカッションをして、他者の意見に刺激されて自分の理解がどんどん深まっていくという講義であったため、映像を見るときもディスカッションをするときも休む暇もなく常に頭を動かしている状態であったからである。映像を見て自分が何を感じ、どのように感じたのかということ言語化して他者に伝えることは容易ではなかったし、他者の意見を聞きながら「なぜ自分はこのようなことに気づけなかったのだろうか」と感じることは多々あったが、そのような思いをしたからこそ非常に印象に残る講義であった。

また、この講義を通して、自分の中に生じた違和感を大切にすることを学んだ。過去には、何かに違和感を抱いてもそれを気に留めずにスルーしてしまうことが多々あった。しかし、この講義を受講して、違和感を抱いたらなぜ自分はそれに対して違和感を抱いたのか、どのような点に対して違和感を抱いたのかを考え、それを言語化してみることによって理解を深めることができると感じた。

講義の時に限らず、日常生活においても、他者と会話していて何か話にくさや波長の合わなさ、居心地の悪さを感じたときに「今なぜ自分はこのような感覚を抱いているのか、それはどのような気持ちなのか」ということを以前よりも考えられるようになったと感じている。なんとなく他者と付き合うのではなく、自分の気持ちに誠実になり、自分の気持ちと向き合いながら他者との交流を続けていけば、専門家として必要な敏感さが少しずつ身についていくのではないかと感じた。

最後に、この講義において最も重要だと感じたことは「文脈の中で二者の関係を見る」ということである。一部分だけを切り取って子どもの状態を判断するのではなく、全体的な流れの中で母親と子どもの関係を見ていくことで親子の間に流れる情動を感じ取ることが大切なのだということを学んだ。そのような見方をすることにより、一部分だけを切り取った場合には見えてこなかった子どもの心の動きが見えるようになったと映像を見ながら実感した。私は特に「お絵描きボードにぐるぐる殴り書きをする男児」の事例（『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』の事例9、pp.118-121を指す）が強く印象に残っている。

るが、あのぐるぐる書きなぐるという行動も、その場面だけを切り抜くとどのような思いがあってこの行動をしているのかが全く分からなかった。しかし、その後母親と再会した場面ではさらに激しくぐるぐる書きなぐっていたことから、この行動は自分の不安な気持ちを静めるためのこの子なりのコーピングであったことが理解できた。気になる行動にすぐに飛びついて考えるのではなく、どのようにその行動を行っているのか、流れの中でどのように変化しているのか、その行動は全体の流れの中でどのような意味を持つのか、ということを考えながら見立てをしていかなければならないと感じた。この講義で学んだことを常に頭に留めながらこれからクライアントとの関わりを行っていききたい。

(後期科目「障害児者心理学特論」での体験談)

「自己を振り返りながら受講することで自分の身に起きた変化」

半年間の障害児者心理学特論の受講を終えようとしている今、私自身大きく変化を感じていることは、自分自身が今何をどのように感じているのかということについて敏感になったこと、また、日常生活において他者とのかかわりの中で違和感を覚えたときにその違和感について考え、違和感をスルーしなくなったことである。また、自分の過去を振り返りながら本講義を受講することで、自分にも多少なりとも「あまのじゃく」な部分はあったということに気づくことができた。

過去の私は、「親の言うことは正しい」、「大人の言うことは正しい」となにも疑うことなく反抗することもなく親や教師など

周囲の大人に従ってきた。一応自分の意見は持っているにもかかわらずそれを表現することなく、周囲の大人たちに喜ばれるであろう意見を言うようにしていた。そのように、自分の本音を出さないようにして周囲の期待に沿っているうちに、どんどん自分自身が今何を感じているのかということに鈍感になってしまったのではないかと、また、「自分について考えること」を自然と放棄してしまっていたのではないかと感じている。しかし、この講義においては貴重なビデオを見せていただいたり、テキストの事例を読んだりする中で自分自身の経験を振り返ることも多々あり、その経験においてどのようなことを感じたかということと言語化する機会をたくさんいただき、そのために以前よりも自分が抱えている感覚に気づくことができるようになった。また、他者とかかわる中でモヤっとする感覚を抱いたとき、以前であれば少しでもそのような感覚が生まれると「私にとってこれは不快な感覚だ」と判断し、そのことについては考えないようにしていた。しかし、現在ではモヤっとした感覚が自分に芽生えたときになぜ今自分はモヤっとしたのかということ立ち止まって考えられるようになった。また、立ち止まって考えて、その原因がわかると素直にそれを表現できるようになった。過去の私であれば違和感をスルーし、何も考えないようにすることで自分が傷つかないように自分を守っていたであろうが、その時よりも自分自身の気持ちに素直になれる今のほうが心理的に健康になったような感覚がある。

また、私は何となくではあるが幼いころからあまり母親に甘えてきていないような感覚があり、母親自身も私に対して「べっ

たりされるのが嫌なドライな子」という感覚を持っていたようだ。過去を振り返ってみると、あまり母と触れ合った記憶がなく、母にべったりな弟や妹を見るたびに「本当は私も甘えたいのに」と思っていたことが蘇ってくる。しかしいざ母親が私に焦点を当てて話し出すと、私は母親に対して冷めた口ぶりで話していたことも思い出される。私自身にもそのように多少なりとも「あまのじゃく」な部分があったのだと知ることができたことは私にとって非常に大きなことであった。本当は母に頼りたいと思っ^ていても自分の中の何かが邪魔をしてなかなか母を頼ることができなかつた私であるが、上述したようなことに気づくことができた今、自分の思いに素直になることができ、母との関係は以前よりも非常に良好になったと実感している。

他者について知るにはまずは自分のことについて自分自身でよく理解できていなければならないと私は思う。これからも、自分の中に生じた違和感を大切にしつつ、自己理解を深めつつ、日々自己研鑽していきたい。

*

前期の体験談によると、A子さんはこの講義形式で、ビデオ供覧によって臨場感を抱きながら、自らの感性を休みなく働かせながら学んだという。その結果「自分自身が今何をどのように感じているのかということについて敏感になったこと」、そして「日常生活において他者とのかかわりの中で違和感を覚えたときにその違和感について考え、違和感をスルーしなくなったこと」が述べられている。

私が講義でいつも強調していたことの一つが「人間観察を行う際に、自分の中に生

じた違和感を大切にすることである。

『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く』「第1章 精神医学における症状を再考する」「4 新たな症状はどのようにして生み出されるか——4段階のプロセス」(小林、2017、pp.17-20)で詳述したように、新たな症状が概念化されるプロセスで、まずもって重要となるのが「患者に対して抱く違和感を感じ取ることsensation」だと考えてきたが、患者の理解と治療を考える上でそのことが鍵となると思うからである。

さらにA子さんは「自分の気持ちに誠実になり、自分の気持ちと向き合いながら他者との交流を続けていけば、専門家として必要な敏感さが少しずつ身についていくのではないかと感じた」とも述べている。「専門家として必要な敏感さ」は私の言う臨床センスに通じるが、他者理解のためには自己理解を深めることが大切であること気づきである。

さらに後期で、A子さんは自分の中の「あまのじゃく」心性に目が向くようになり、その背景に自分と母親との関係が深く関与していること、そして、それはこれまで自分の中に生じた違和感(不快感)に向き合うことを回避していたことがそのことと繋がっているとも語っている。これこそ精神療法でいうところの洞察そのものである。つまり、ここで語られているA子さんの気づきのプロセスは、私が日頃体験している精神療法(心理療法)のプロセスとまったく同質なものだということである。そのことをA子さんいみじくも「過去の私であれば違和感をスルーし、何も考えないようにすることで自分が傷つかないように自分を守っていたであろうが、その時よりも自分

自身の気持ちに素直になれる今のほうが心理的に健康になったような感覚がある」と述べている。A子さんの今回の体験は、精神療法とは何かという本質的な課題の手がかりを与えるものであったと私には思われるのである。

ここに述べられているA子さんの体験談は私のねらいが通じた手応えを感じさせてくれる。

2. B子さんの場合

(前期科目「精神医学特論」での体験談)

「支援の糸口となる観察」

この授業を通して第一に学んだのは、臨床実践における本当の意味での観察とは何かということである。行動の生起には、何らかの情動が存在しているはずで、それを捨象して行動だけを抽出することは何ら意味を成さない。つまり、客観的な行動のみを記述しても、個々の理解には至らないのである。しかし、だからと言って、行動を観察することが無意味なわけではなく、表層に現れている行動にも情動は見え隠れしている。それが、行動のHow、「どのように」行動しているかであり、目に見えない情動をそこから丁寧に感じ取っていくことが観察には肝要なのである。だが、そこに現れている情動を文脈から切り離して捉えることは不可能である。なぜなら、情動はひとりだけで生起するものではなく、そこには重要な他者の存在がかかわっているはずであるからだ。

授業開始当初は、特に、母子間に立ち込める空気を文脈のなかで捉えることに非常に苦戦していた。それは、私が、子どもと母親の動きをそれぞれ分断して観察していたからである。そのような視点で観察する

ことには、子どもの行動の原因を子どもの側に求めるといふ危険が潜んでいることに今更ながらに思い至った。しかし、行動のHowに情動の動き、心の揺れ動きがあらわれるというエッセンスを学んでからは、子どもがどのように行動しているかを注意深く見ていくようになり、すると要所要所に違和感を覚える瞬間があり、そこにはいつも母親の存在があることに気づいた。そうしてはじめて、母子間に立ち込める独特な空気や、二者の間の情動の動きを少しずつではあるが感じ取れるようになった。

そして、文脈や関係のなかで観察することではじめて、子どもの一見奇妙な行動が、関係を崩さず、かつ、自分を守るためのコピーングであるということに気づけるのである。そして、そのコピーングが母子の関係のなかでどのような意味をもっているのか、文脈のなかで理解していくことによって、母子の関係病理はより鮮明に浮かび上がり、そこでようやく、支援の糸口が見えてくるのではないだろうか。つまり、母子を関係性のなかで見ることは、それだけ支援において重要な意味をもつということである。

私はこの授業を通して、上記のような臨床実践において重要となる着眼点を、貴重な事例を通してトレーニングすることができ、今後の臨床経験に向けて、非常に有意義な学びを得ることができた。

ただ、私の観察の際の癖として残っているのが、行動の背景に意図を見出そうとする点である。それは、事例10（『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』の事例10、pp.105-109を指す）の「ブロックの色をわざと間違えて母に訂正してもらおう」という記述にもあらわれている。ここ

で私に足りなかったのは、子どものコーピングとしての行動は、そうせずにはいられない無意識の動機によるものであるという観点である。子どもがなんとか苦しい環境のなかで生き残ろうとして、その結果、無意識の動機にふりまわされているということは、関係性の病理を理解するためには欠かせないものである。

(後期科目「障害児者心理学特論」での体験談)

「自分を知ること」

この授業を通して、将来心理職として働くとは一体どういうことか、そのためには何が必要かといったことの本質を学ぶことができた。これまでは、心理面接というものを考えるとき、治療者側の側面として共感や受容、傾聴といった技術の概念だけが私の中で先行しがちであった。そうすると、C1の話の中で共感できるところがあれば返さねば、誰にも受容されてきていないC1の思いを受容せねばと、どんどん形だけの面接になってしまい、目の前にいるC1が今ここで何を感じているのかが見えなくなってしまっていた。

しかし、この授業で「勤」「力動感」「メタファ」といった概念に出会い、面接の技術よりも心理療法の本質の部分に気づき、目を向けられるようになった。その心理療法の本質とは、C1が「いかに語ったか」に留意し、力動感や勤を働かせてそのころのありようを掴むために、治療者自身が自らのころのありようや、自らのアンビヴァレンスを理解しておくことが不可欠であり、その過程で必要となる敏感さや自分自身の感情に対して解放されていることが心理療法の本質であると私には思われた。

そして自分の体験に対して向き合い、人の感情というものに身をもって理解を深めることができ初めて、C1が感じているころのありようや感情に、形は全く同じではなくても治療者自身にも少なからず共通する感覚を味わえるのであり、そこでようやく共感というものが自然と生まれてくるのであろう。そして、共通する感覚を味わい、治療者自身にもそのころのありようを自分のなかにも遠からず存在するものとして輪郭が掴めるようになるからこそ、メタファとして表現することができるようになるのではないだろうか。

このような気付きは私にとって大きな収穫となった。これまで大学院の授業でインテーク面接のロールプレイを行ってきたが、そこでは自己理解をすることが非常に重視されていた。しかし、これまで私が自己理解のためにやっていたことは、自分に何ができて何ができていないのかを考えることばかりであったように思う。それは、言ってしまうと治療者に成りきるかどうかといった表面的な部分を判断しようとしていただけであった。

ボランティア体験の中でも、これまでどんな話でもあっけらかんと話していた子が初めて沈痛な面持ちで話をしたとき、それまで掴みどころがないと感じていたその子の苦痛がまざまざと感じられたことがあったが、それは強烈な感覚として感じられただけで留まってしまい言葉にすることができなかった。今振り返ると、その子の感情がまざまざと感じられたということは、まったく同じではないにしろ、遠からず、私の中にもその子の感じているものと似たものが体験として存在しているのではないかと考えられる。このようにして得られた

気づきを更に深めていくためにも、自分自身の体験を振り返りこれまでどんな感情を感じてきたのか、自分自身のこころのありように丁寧に目を向けていきたいと思う。

*

私が講義で大切にしてきたことの一つは、「関係を見る」とはどのようなことかを実感してもらうことである。そのことについてB子さんは「母子間に立ち込める空気を文脈のなかで捉えることに非常に苦戦していた」と率直に述べている。その中でB子さんは次第に重要なことに気づくようになった。それが「行動の生起には、何らかの情動が存在しているはずで、それを捨象して行動だけを抽出することは何ら意味を成さない。つまり、客観的な行動のみを記述しても、個々の理解には至らない」ことであった。さらに「表層に現れている行動にも情動は見え隠れしている。それが、行動のHow、『どのように』行動しているかであり、目に見えない情動をそこから丁寧に感じ取っていくことが観察には肝要なのである」と気づきは深まっている。

このような重要な気づきは、実際の母子関係のありようをリアルに示してくれる観察ビデオの供覧があって初めて可能になる。「関係を見る」ことに焦点を当てた人間観察の重要性を示しているといつてよい。

ややもすると、臨床家はクライアントの語りそのものには注意を向けても、その語りにどのような思い（情動）が隠されているかについては注目しないことが多い。「何を語っているか」については多弁であるが、「いかに語っているか」については語ることが少ないのである（Stern,2010）。行動についてもしかりである。「何を行動した

か」ではなく「いかに行動したか」にこそクライアントの思いが潜んでいるからである。このことにB子さんは気づいている。これこそ「感性教育」で私がねらっていることの一つである。

さらにB子さんはA子さんと同様に、「(クライアントと)共通する感覚を味わい、治療者自身にもそのこころのありようを自分のなかにも遠からず存在するものとして輪郭が掴めるようになる」こと、そして、このことが「メタファとして表現することができるようになる」ことへと繋がっていると明確に述べるまでになっている。これこそクライアントのこころの動きを自らのこころの動きを通して掴み取ることのコツである。

そして、Aさんが強調し、B子さんも同様に指摘している「文脈の中で二者の関係を見る」ことについてである。症状とみなされやすい行動の意味が「関係を見る」ことによってはじめて浮かび上がってくるが、それは観察者がクライアントのこころの動きを感じ取ることができるからである。ここにも「関係を見る」ことの重要性が示されている。

最後に、私がB子さんの体験談で特に教えられたことを取り上げておこう。B子さんはこれまでも自己理解の重要性は教えられてきたが、それに対してB子さんが努めてきたのは「自分に何ができて何ができていないのかを考えることばかりであった」という。ここに窺われるのは、発達障碍の心理臨床でよく指摘される障碍特性を観察する視点と同様の見方である。つまり「個体能力（障碍）発達観」である。「個」に焦点を当てた観察で生まれやすい（障碍）発達観である。それに比して「関係」に焦

点を当てることによって初めて身につくのが関係（障碍）発達観である。私の講義は後者を目指して行ってきたということが出来るのである。

*

以上、私が試みてきた「感性教育」を加味した臨床教育での学生たちの体験談から教えられたことを述べた。大学院での4年間を振り返ってみると、学部で試みてきた「感性教育」（小林、2018a、2018b、2019a、2019b、2019c、2020b）では味わえない深みのある内容となったと思う。

二人の学生たちが正直に吐露しているように、自らの感性を刺激される教育はけっして楽なものではない。自らの存在そのものが問われる体験でもある。そのため、この4年間でこのような教育についてこれず、過去の古傷が刺激され、挫折し（そうになっ）た学生もいたことに私は気づかされた。それは私自身の教育方法の未熟さに依っている。申し訳ない気持ちで一杯である。ただ彼らに一つだけ伝えたいのは、自らの過去（の古傷）から目をそらしては本物の心理臨床などできやしないということである。なぜなら私たちが相手にするクライアントたちはもっと深い古傷を抱え、それから目をそらして生きていかざるをえない存在だからである。

最後になるが、これまで私の講義で自らの体験談を率直に語ってくれた大学院生のみなさんに感謝の気持ちを述べるとともに、私の試みが臨床家として育つ上で多少なりとも力となればと願って止まない。

文献

- 小林隆児 (2014). 「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム—「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて—。京都、ミネルヴァ書房。
- 小林隆児 (2017a). 臨床力を高めるための感性教育 (研究叢書No.42)。福岡、西南学院大学学術研究所。
- 小林隆児 (2017b). 臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—。東京、誠信書房。
- 小林隆児 (2017c). 自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く—関係発達精神病理学の提唱—。京都、ミネルヴァ書房。
- 小林隆児 (2018a). なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか。西南学院大学人間科学論集, 13(2); 215-243.
- 小林隆児 (2018b). なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができないか—「感性教育」の新たな試み—。西南学院大学人間科学論集, 14(1); 279-318.
- 小林隆児 (2018c). 常識common senseを疑い、共通感覚sensus communisを呼び醒ます—「感性教育」の目指すもの—。西南学院大学付属臨床心理センター紀要, 創刊号, 2-7.
- 小林隆児 (2019a). 大学新生を対象としたアクティブ・ラーニングとしての「感性教育」の試み。西南学院大学人間科学論集, 14(2); 161-217.
- 小林隆児 (2019b). なぜ「感性教育」は学生の人格発達を促すのか。西南学院大学人間科学論集, 15(1); 145-180.

- 小林隆児 (2019c). アクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」は学生にとってどのような学びの体験か. 西南学院大学人間科学論集, 15(1); 181-225.
- 小林隆児 (2019d). 感性教育は人間教育に通じる—臨床教育についてつれづれに思うこと—. 西南学院大学附属臨床心理センター紀要, 2号, 3-17.
- 小林隆児 (2020a). 自閉症とともに歩んだ五十年—臨床研究から臨床教育へ—. 西南学院大学人間科学論集, 15(2); 255-291.
- 小林隆児 (2020b). 感性教育と精神医学教育—学生の学びから学ぶ—. 西南学院大学人間科学論集, 15(2); 119-164
- Stern, D. N. (2010) *Forms of vitality: Exploring dynamic experience in psychology, the arts, psychotherapy, and development*. Oxford University Press, London.
- Sullivan H. S. (1954). *Psychiatric Interview*. Norton. 中井久夫ら訳 (1986). 精神医学的面接. みすず書房.